

向野遺跡第2次発掘調査報告書

鳥取県立倉吉農業高等学校グラウンド整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査

平成14年度

倉吉市教育委員会

向野遺跡第2次発掘調査報告書



平成14年度
倉吉市教育委員会

序

この報告書は、鳥取県立倉吉農業高等学校グラウンド整備事業に伴い倉吉市大谷字向野・沓掛において実施した向野遺跡第2次発掘調査の記録です。

この遺跡の南側には、国指定史跡伯耆国府跡（国府跡 法華寺畠遺跡 不入岡遺跡）・伯耆国分寺跡があり古代伯耆国の政治・経済・文化の中心でした。これらの遺跡はいずれも古代の地方行政を知る上で貴重な資料として注目されています。

このたびの発掘調査により、国府跡などと同じ時代の集落、道路跡などが確認されました。丘陵上に広がる遺跡の一部分の調査ではありますが、国府跡の周辺「国府」の様子を示す貴重な資料であるといえます。

本書は発掘調査報告書として不十分なものではありますが、文化財の理解・普及に、あるいは教育・研究の一資料としてお役に立てば幸いに存じます。

おわりになりましたが、調査にあたりご協力いただきました地元関係者ならびに関係機関各位に深く感謝の意を表するものです。

平成15年3月

倉吉市教育委員会

教育長 福光純一

例　　言

1 本報告書は、県立倉吉農業高等学校グラウンド整備事業に伴い、倉吉市教育委員会が鳥取県倉吉市大谷字向野・菅掛において実施した、埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2 調査体制は次のような組織・編制である。

調査主体 倉吉市教育委員会

事務局 倉吉市教育委員会文化課

　　八田洋太郎（教育長 14年3月まで）　　福光 純一（教育長 14年6月から）

　　景山 敏（教育次長）　　鶴田 康幸（文化課長）

　　藤井 晃（文化課課長補佐兼文化財係長 13年度）　　佐々木英剛（文化課課長補佐兼文化財係長 14年度）

　　藤井 敏子（文化財係主任）　　森下 哲哉（文化財係主任）

　　楢鈴智津子（文化財係主任）　　加藤 誠司（文化財係主任）

　　岡本 智訓（文化財係主事 13年度）　　山崎 昌子（文化財係主事）

　　岡平 拓也（文化財係主事）

調査補助員 山根 雅美・松田 恵子（13年度）

内務補助員 金田 朋子（13年度）

内務整理 泉 美智子・世波由美子・山本 鑑・前坂 英樹・湯浅 博・明里 千秋（13年度）

　　松鶴あつ子・竹嶽 晴子（13・14年度）

　　逢藤 美佳・大川 京子・大西 利恵・間 美幸・田口小代子・戸田めぐみ

　　村垣みゆき・森木 恵子（14年度）

3 現地調査は岡平が担当した。本書の執筆は調査員が討議し、岡平が行った。

4 第1図（地形図）は、国土地理院発行の1:25,000地形図「倉吉」の一部を複製・加筆した。

5 掘図中の方針は国土座標第V座標系の北を指す。

6 遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一した。

7 調査によって得られた資料は、倉吉市教育委員会が保管している。

本文目次

I 調査に至る経過	1
II 位置と歴史的環境	2
III 調査の概要	6
IV まとめ	32
報告書抄録	

挿図目次

第1図 周辺の地形と遺跡分布図	3
第2図 向野遺跡調査区位置図	5
第3図 向野遺跡（2次）遺構全図 その1	7
第4図 向野遺跡（2次）遺構全図 その2	9
第5図 1号掘立柱建物遺構図	11
第6図 2号掘立柱建物・7号横列遺構図	12
第7図 3号・4号・8号掘立柱建物遺構図	13
第8図 5号掘立柱建物・1号・2号横列遺構図	14
第9図 6号・9号・10号掘立柱建物遺構図	15
第10図 7号掘立柱建物・5号横列遺構図	16
第11図 11号掘立柱建物遺構図	17
第12図 12号掘立柱建物遺構図	18
第13図 13号・15号掘立柱建物遺構図	19
第14図 14号掘立柱建物・11号横列遺構図	20
第15図 3号・4号・6号・8～10号横列遺構図	21
第16図 2号道路遺構a-a'断面図	22
第17図 1号道路遺構遺構図	23
第18図 2号道路遺構遺構図	25
第19図 1号住居遺構図	27
第20図 2号住居遺構図	28
第21図 1号・2号住居状遺構遺構図	29
第22図 段状遺構遺構図	30
第23図 1号土塁遺構図	31
第24図 1号土塁・1号・2号落し穴遺構図	31

図 版 目 次

図版1 道路 調査地遠景 調査地全景

図版2 道路・造築 1号掘立柱建物 1号掘立柱建物柱穴断面 2号掘立柱建物・7号樹列 2号掘立柱建物柱穴断面
1号・2号掘立柱建物遠景

図版3 造築 5号掘立柱建物 7号掘立柱建物 13号掘立柱建物 13号掘立柱建物柱穴工具痕跡

図版4 造築 1号・2号道路造構完掘状況 1号道路造構完掘状況 1号溝断面 1号道路造構断面

図版5 造築 2号道路造構硬化面 2号道路造構硬化土掘下中 2号道路造構断面 2号道路造構完掘状況

図版6 造築 1号住居 2号住居 1号住居状造築 2号住居状造築

図版7 造築 1号土壙墓 1号土壙 1号土壙断面 1号落し穴 2号落し穴

図版8 造物

I 調査に至る経過

平成11年7月、鳥取県教育委員会から、倉吉市大谷に所在する鳥取県立倉吉農業高等学校のグラウンド拡張計画が提示され、埋蔵文化財の有無とその取り扱いについて問い合わせがあった。計画は、同校南側の丘陵・谷部にグラウンドを拡張し、テニスコート・アーチェリー場・野球場などを新設するもので、丘陵部分の大幅な削平を行う予定であった。開発予定地周辺は、同一丘陵上の向野遺跡（1次調査、平成9年度に女子寮新築に伴い実施）、南に隣接する丘陵上の円史跡伯耆国守跡などをはじめ多数の遺跡が密集する地域である。現地を踏査した結果、丘陵部分・谷部分共に濃密な遺物散布がみられたため、平成12年度に国・県の補助を受け試掘・確認調査を実施した。調査の結果、丘陵部分では落し穴・柱穴と考えられるピットなどを、谷部分では溝を確認し、遺跡が存在することが明らかとなった。この間、土質等の問題からグラウンドのレイアウトが変更になり、造成は基本的に盛土で行われることになった。

試掘・確認調査の結果をもとに、鳥取県教育委員会総務福利課、鳥取県立倉吉農業高等学校・工事を直接担当する鳥取県倉吉土木事務所（当時）など関係機関と協議を行った。その結果、谷部分は表土の除去が行われるもの、遺物包含層を含め遺跡は保存されることになった。しかし、丘陵上の平坦部分は現地表から遺構検出面まで約15cmの耕作土しかなく、工事により遺跡に影響がでることが考えられたため、平成13年度に発掘調査を行うこととした。丘陵東側斜面部分については、盛土が非常に厚く（最深部で約5m）、半永久的な施設が造成されるとの判断から発掘調査範囲に含めた。また、平成12年度には行えなかった発掘調査区西側に隣接する、既にグラウンドとして造成・利用されている部分の確認調査を発掘調査と並行して実施することとした。

発掘調査は倉吉市が鳥取県から委託を受け、倉吉市教育委員会文化課が主体となって行った。調査面積は4,998m²で、現地調査は平成13年4月18日に開始し11月5日に終了した。調査の結果、既にグラウンドであった部分にも遺跡が広がっていることが明らかになつたため、新しく造成されるグラウンドに伴う舗溝・ネットフェンス基礎など小規模な掘削を伴うものは随時立会調査を実施した。平成14年1月27日に行った、野球場バックネット基礎の掘削にともなう立会時に、一辺約0.9mの方形の掘立柱建物柱穴を確認したため、1月30日造構の取り扱いについて関係機関と協議を行った。バックネットの位置および工法の変更は不可能であり、確認した造構を発掘調査することとなった。グラウンドは平成15年度供用開始のため調査および工事の早期終了が必要であり、平成13年度に現地作業を終了させ、13年度で終了する予定の整理作業・報告書作成作業を平成14年度に行うよう委託契約を変更した。平成14年2月22日からバックネット部分の追加調査を開始し3月20日に終了した。追加調査の面積は293m²で、合計5,291m²を調査した。

II 位置と歴史的環境

向野遺跡は、倉吉市街地から西に4km、大山の火山灰によって形成された西から東へのびる、通称久米ヶ原とよばれる丘陵地の東端に位置する。久米ヶ原丘陵東の麓部は狭い谷が幾筋もあり込み、丘陵が樹枝状に分岐する。当遺跡は、南北をその狭い谷に挟まれた標高30~40mの舌状を呈する丘陵上に立地する。今回の第2次調査地は、その丘陵の南側、丘陵が南にふくらむ部分の、丘陵上から南及び東にかけての斜面である。今回の調査地からは谷を抜んで南側には伯耆国行跡を(国行跡北辺から直線距離で約100m)、東側には法華寺跡を直接望むことができる。

向野遺跡の立地する丘陵に遺物が散布する事は古くから報告されているが、発掘調査が実施されるようになつたのは近年になってからで、遺構が確認されたのは県立倉吉農業高等学校女子寮新築に伴う平成9年度実施の第1次調査が初めてである。1次調査地は今回の調査地から北西に約250m離れた丘陵の反対側、北側緩斜面に位置する。468mの狭い調査範囲内から、落し穴3基、竪穴式住居4棟、住居状遺構2基、底面に波板状凹凸面と考えられる小土壙列を伴う溝状遺構を5状などが確認されている。

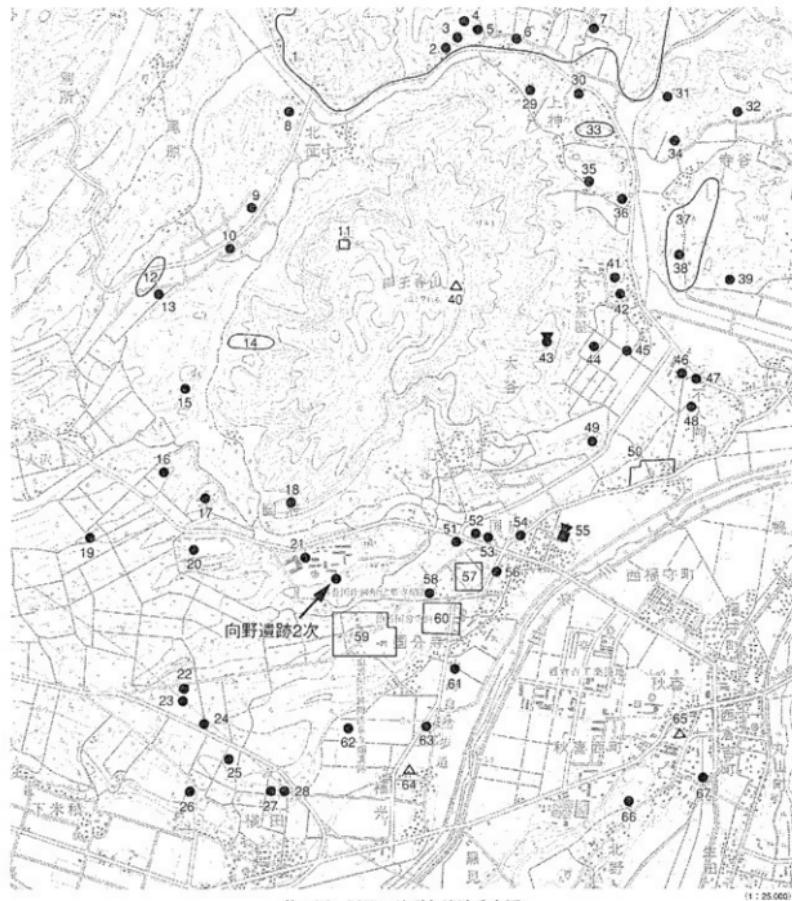
今回の調査地と伯耆国行跡との間の狭い谷部分では、平成12年度実施の試掘・確認調査により縄文時代晚期以降平安時代までの溝4条を確認している。平安時代の遺構検出面の下、主に古墳時代から奈良・平安時代までの遺物包含層からは、多数の木片に混じり木製陶器・煮申・曲物などの木製祭祀遺物が出土しているが、溝は砂屑と軟質な黒色粘土による自然堆積で、周辺には護岸など人工的な痕跡は確認されなかった。

なお、今回の調査地は倉吉市大谷字向野、字音掛にまたがる。「音掛」は、丘陵全体を占める「向野」のなかに飛び地状にある字名で、遺跡は丘陵全体に広がりをもつと考えられることから、「音掛」も含め「向野遺跡」と呼ぶことにした。

向野遺跡の立地する久米ヶ原丘陵東端部は、数多くの遺跡が確認されている地域である。以下、第1図を中心に関連の歴史的状況を述べる。

旧石器時代では中尾遺跡(49)でナイフ型石器などが出土しているが遺構はまだ未検出である。縄文時代には丘陵上を中心に落し穴が検出された遺跡が増えている。中尾遺跡では84基もの落し穴が検出されているほか、向野遺跡1次(21)でも3基の落し穴が検出されている。また、微高地に位置する河原毛田遺跡(61)でも落し穴が検出されている。弥生時代、前期の遺構は中尾遺跡で屋内貯蔵穴を4基もつ平地式住居と、竪穴式住居1棟ずつが、イキス遺跡(8)で土壙墓群が検出されている。中期になると、中峯遺跡(20)・福田寺遺跡1次・3次(22・23)・中尾遺跡など丘陵部を中心に集落が知られている。後期になるとさらに集落の数は増加し向長谷遺跡(15)・遠藤谷峠遺跡(16)・白市遺跡(17)・沢ベリ遺跡(1~3次・46~48)などがある。また、向野遺跡北側の四王寺山山麓には大谷後口谷墳丘墓(18)・三度舞墳丘墓(41)・柴栗古墳群内の弥生墳丘墓(36)などがつくられる。続く古墳時代の集落は中峯遺跡・宮ノド遺跡(56)・櫛塚遺跡(54)などで知られている。前期の首長墳では因府川左岸の微高地に東伯耆地方で最古級の首長墳といわれる国分寺古墳(55・前方後方?墳60m)がつくられる。その後は琴柱形石製品や鐵形石などが出土した上神大将塚古墳(35・円墳30m)・大谷

1 上神古墳群	6 桜木遺跡	11 四王寺跡	16 遠藤谷峠遺跡	21 向野遺跡1次
2 上神119号墳	7 上神宮ノ前遺跡	12 コザンコウ遺跡	17 白市遺跡	22 福田寺遺跡1次
3 クズマ遺跡1次	8 イキス遺跡	13 道祖神跡遺跡	18 大谷後口谷墳丘墓	23 福田寺遺跡3次
4 クズマ遺跡2次	9 取木遺跡	14 古墳群	19 大沢前遺跡	24 東福寺遺跡
5 イガミ松遺跡	10 一坂半田遺跡	15 向長谷遺跡	20 中峯遺跡	25 岩屋遺跡



第1図 周辺の地形と遺跡分布図

26 福田寺道路2次	35 上神大谷塚古墳	44 小林古墳群	53 打塚道路	62 鳴ノ掛道路
27 矢戸遺跡2次	36 桜塚古墳群	45 イザ原古墳群	54 那坂道路	63 今倉道路
28 矢戸道路1次	37 屋喜山古墳群	46 沢ベリ遺跡1次	55 国分寺古墳	64 今倉城跡
29 平畠ヶ遺跡	38 屋喜山9号墳	47 沢ベリ遺跡3次	56 宮ノド道路	65 北ノ城跡
30 東伏間古墳	39 西ノ谷道路	48 沢ベリ遺跡2次	57 法華寺道遺跡	66 八幡平ラ道路
31 トドロケ遺跡	40 大谷城跡	49 中尾遺跡	58 国分寺北道路	67 空岡田遺跡
32 西前道路B地区	41 三度舞墳丘墓	50 不入岡遺跡	59 伯耆国序跡	
33 鶴山道路	42 イザ原道路	51 国府間道遺跡1次	60 伯耆国分寺跡	
34 西前道路A地区	43 大谷大谷塚古墳	52 古神官山古墓	61 河原毛田道路	

大将塚古墳（43・前方後円墳50m）などが知られるものの、大形の前方後円墳が継続してつくられることはない。また前期の小規模な方墳が宮ノ下遺跡で確認されている。古墳時代後期には四王寺山裾部や久米ヶ原丘陵に古墳群がつくられる。両長谷遺跡では板石を用いた横穴式石室を主体とする終末期の古墳群が調査されている。

奈良時代には、当遺跡の南側の丘陵に伯耆国庁跡（59）・伯耆国分寺跡（60）・国庁に付属する官衙で、後に国分尼寺跡に転用されたと推定される法華寺畠遺跡（57）が近接して置かれる。また、北西約1.5kmには同じく国庁に付属する官衙跡である不入岡遺跡（50）が、北に位置する四王寺山（標高171m）山頂には新羅海賊調伏のため建立された四王寺跡（11）が所在し、古代伯耆國の政治・経済・文化の中心であった。また、当遺跡の南西約150mの位置にある河原毛田遺跡では東西方向に延びる平行する溝が確認されている。溝間の心々距離は15mで、西側に延長すると国庁南輔を通り、古代山陰道の可能性が考えられている。この時期の集落は中峯遺跡・中尾遺跡・国分寺北遺跡（58）・向野遺跡・郷塚遺跡・鶴ノ掛遺跡（62）・矢戸遺跡1次・2次（27・28）などが知られている。国分寺北遺跡は規格性のある建物配置と区画構からなり国庁に関連する施設の可能性がある。この時期の墳墓は調査例がほとんど無く明らかでないが、倉吉市北側の向山丘陵上に立地する長谷遺跡で横穴式石室を模した石室内に土師器蔵骨器2個を合葬した火葬墓が調査されている。

宮ノ下遺跡・郷塚遺跡では11～13世紀の遺物が出土しているが、遺構としてはピット群・土壙が主である。打塚遺跡（53）では12世紀の墳丘を持つ墳墓が発掘調査されている。今倉遺跡（63）では14～16世紀の掘立柱建物群が検出されている。



岡倉前遠景（平成12年度・東から） 左の丘陵が伯耆国庁跡。右が向野遺跡2次調査地



第2図 向野遺跡調査区位置図

III 調査の概要

調査地の基本的層序は、表土（耕作土）、黒褐色土の下に、大山東側の丘陵地帯で通常見られるように黒色土（クロボク）、暗褐色土（漸移層）、ソフトローム層、黄褐色砂質土（ホーキ火山砂層）と続く。遺物を含むのは表土および黒褐色土である。発掘調査に至る経過でも述べたが、丘陵頂部では、黒褐色土・黒色土が遺存していない。既にグラウンドであった部分には表土の代わりに客土（真砂土）がある。調査は、表土・遺物包含層を基本的に人力によって掘り下げたが、東斜面部分については表土が厚いため、重機により表土を掘り下げた。遺構検出は、表土および黒色土を掘り下げた段階で行った。

調査の結果、確認した遺構は掘立柱建物15棟、横列11条、道路状遺構2条、堅穴式住居2棟、住居状遺構2基、段状遺構1基、土壙墓1基、落し穴2基、土壤1基である。以下、遺構ごとに概要を述べる。

掘立柱建物

1号掘立柱建物 既グラウンド部分の確認調査トレンチで検出。桁行3間（5.8m）、梁行2間（4.4m）の東西棟である。建物の方位はN-10°-E。桁行は中央間が1.8mで妻側の柱間が2.0mである。梁行は2.2mの等間。柱穴は方形を基本としている。盛土保存が決まっていたため、南側の柱穴のみ断割りし断面の観察を行った。そのうち南西の2つの柱穴で立て替えの痕跡が確認された。柱穴はほぼ同位置で建て替えられているが、北西隅・南西隅の柱穴がやや南北に長く、建物方位が多少ずらされた可能性がある。建物西半分の柱穴からは直径0.25~0.3mの柱痕が確認された。

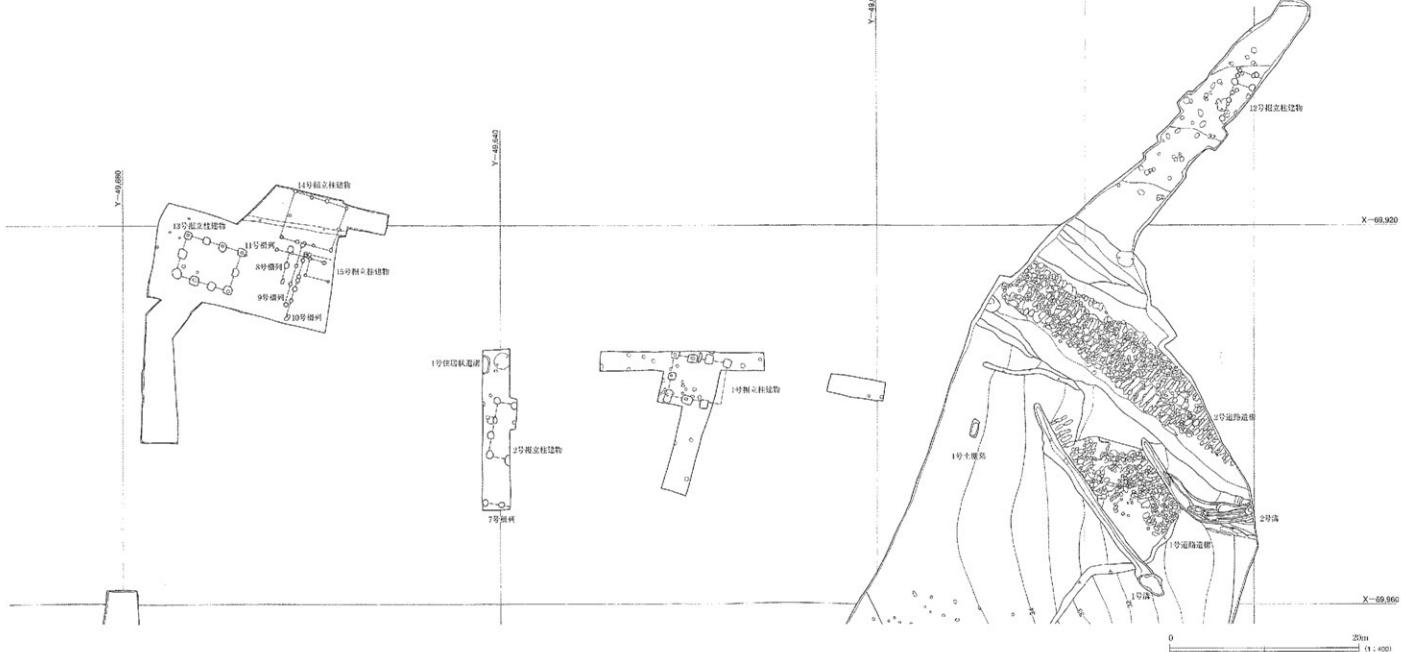
2号掘立柱建物 既グラウンド部分確認調査トレンチで検出。1号掘立柱建物から西南西に約17m離れる。南北3間（5.4m）、東西1間分（2.2m）確認した。建物方位はN-11°-E。南北の柱間は1.8mの等間だが、東西は北側が1.8m、南側が2.2mと不揃いである。柱穴は円形を基本としている。柱穴底面の深さが各柱穴でばらつきがある。南北列北から2本目の柱穴は新旧建て替えが認められるが、旧柱穴は柱筋がそろわない位置にある。断面c-c'では柱痕は柱穴中央から北によった位置で確認され、1号掘立柱建物と同様立て替えにより建物方位がずらされた可能性がある。

3号掘立柱建物 調査地南側で検出。丘陵平坦面の南端に位置する。桁行3間、梁行3間の東西棟である。建物方位はN-12°-E。東側の妻柱は確認されなかった。西側・南側の柱列で建て替えが認められた。桁行5.0m×梁行3.6mから5.1m×3.8mへ、建物西辺・南辺をわずかに拡大させている。旧段階の柱間は桁行が西側の1間が1.8m、その他は1.6mで、梁行は1.2mの等間。新段階の桁行は西側を0.2m広げて2.0m、中央間は変わらず1.6m、東側を0.1m縮小させ1.5mとしている。梁行は南側1間のみ1.4mと拡大させている。柱穴は直径0.4mから0.5m程度の円形である。

4号掘立柱建物 調査地南東で検出。3号掘立柱建物の東から7m離れ、今回検出した建物の南東端に位置する。桁行2間（5.2m）、梁行1間（3.2m）の南北棟である。建物方位はN-2°-W。中央の柱筋には東柱と考えられるピットをやや西によって検出した。柱穴は直径0.3mの円形である。

5号掘立柱建物 調査地南側で検出。3号掘立柱建物の北12mに位置する。建物南辺から南に2.0m離れて2号横列が位置する。桁行3間（7.0m）、梁行3間（5.8m）の南北棟純柱建物である。建物方位はN-21°-E。柱間は桁行が北から2.3m、2.4m、2.3m。梁行は東から1.8m、2.0m、2.0mで、東端1間が狭い。柱穴は直径0.4m~0.5mの円形を基本としているが、東側の柱列のみ0.3mと小さい。

6号掘立柱建物 調査地南側で検出。3号掘立柱建物と5号掘立柱建物の間に位置する。9号掘立柱建物・10号掘立柱建物と切り合う。桁行3間（7.3m）、梁行2間（4.2m）の純柱建物である。建物方位はN-29°-E。柱



第3図 向野遺跡（2次）遺構全体図 その1

III 調査の概要

調査地の基本的層序は、表土（耕作土）、黒褐色土の下に、大山東側の丘陵地帯で通常見られるように黒色土（クロボク）、暗褐色土（漸移層）、ソフトローム層、黄褐色砂質土（ホーキ火山砂層）と続く。遺物を含むのは表土および黒褐色土である。発掘調査に至る経過でも述べたが、丘陵頂部では、黒褐色土・黒色土が遺存していない。既にグラウンドであった部分には表土の代わりに客土（真砂土）がある。調査は、表土・遺物包含層を基本的に人力によって掘り下げたが、東斜面部分については表土が厚いため、重機により表土を掘り下げた。遺構検出は、表土および黒色土を掘り下げる段階を行った。

調査の結果、確認した遺構は掘立柱建物15棟、柵列11条、道路状遺構2条、堅穴式住居2棟、住居状遺構2基、段状遺構1基、土壙墓1基、落し穴2基、土壙1基である。以下、遺構ごとに概要を述べる。

掘立柱建物

1号掘立柱建物 既グラウンド部分の確認調査トレンチで検出。桁行3間（5.8m）、梁行2間（4.4m）の東西棟である。建物の方位はN-10°-E。桁行は中央間が1.8mで妻側の柱間が2.0mである。梁行は2.2mの等間。柱穴は方形を基本としている。盛土保存が決まっていたため、南北の柱穴のみ断割りし断面の観察を行った。そのうち南西の2つの柱穴で立て替えの痕跡が確認された。柱穴はほぼ同位置で建て替えられているが、北西隅・南西隅の柱穴がやや南北に長く、建物方位が多少ずらされた可能性がある。建物西半分の柱穴からは直径0.25～0.3mの柱痕が確認された。

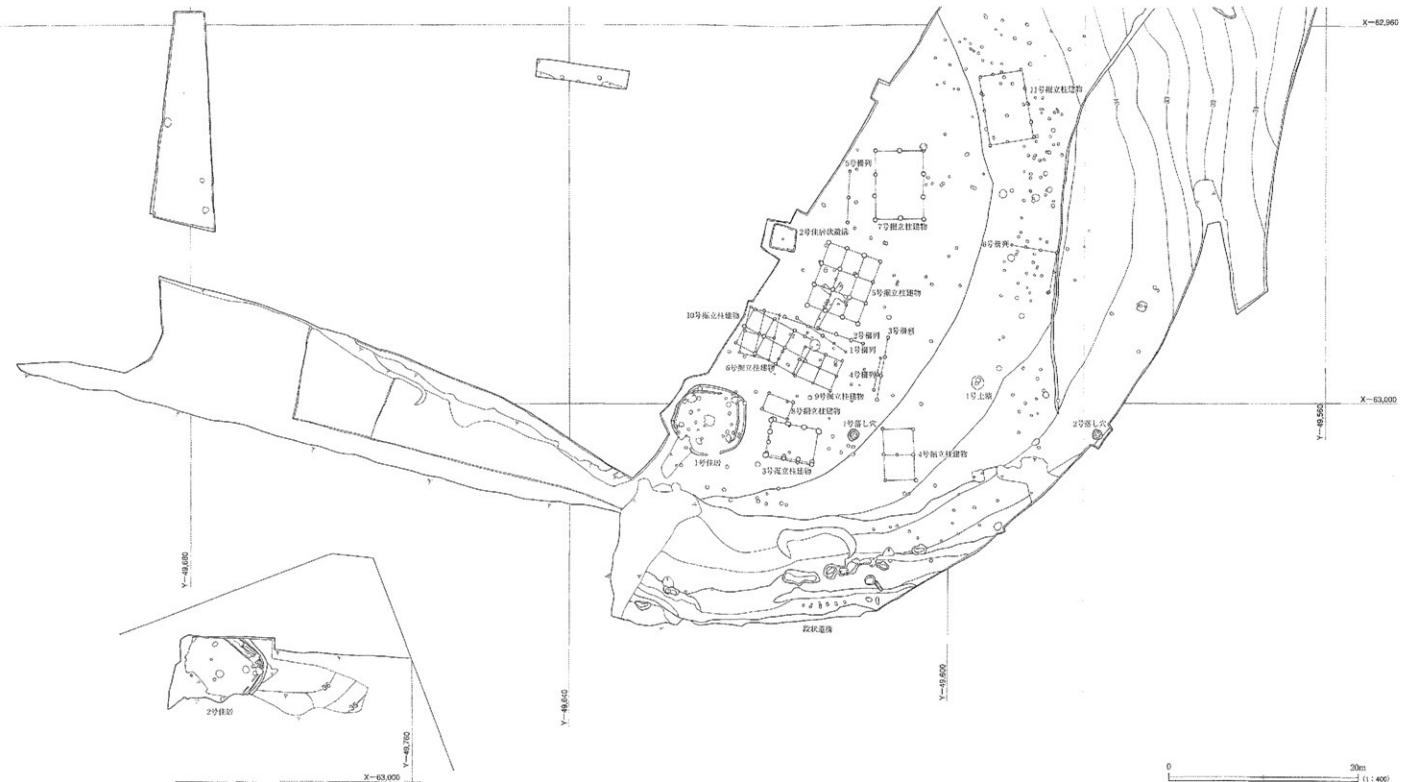
2号掘立柱建物 既グラウンド部分確認調査トレンチで検出。1号掘立柱建物から西南西に約17m離れる。南北3間（5.4m）、東西1間分（2.2m）確認した。建物方位はN-11°-E。南北の柱間は1.8mの等間だが、東西は北側が1.8m、南側が2.2mと不揃いである。柱穴は円形を基本としている。柱穴底面の深さが各柱穴でばらつきがある。南北列北から2本目の柱穴は新旧建て替えが認められるが、旧柱穴は柱筋がそろわない位置にある。断面c-c'では柱痕は柱穴中央から北によった位置で確認され、1号掘立柱建物と同様立て替えにより建物方位がずらされた可能性がある。

3号掘立柱建物 調査地南側で検出。丘陵平坦面の南端に位置する。桁行3間、梁行3間の東西棟である。建物方位はN-12°-E。東側の妻柱は確認されなかった。西側・南側の柱列で建て替えが認められた。桁行5.0m×梁行3.6mから5.1m×3.8mへ、建物西辺・南辺をわずかに拡大させている。旧段階の柱間は桁行が西側の1間が1.8m、その他は1.6mで、梁行は1.2mの等間。新段階の桁行は西側を0.2m広げて2.0m、中央間は変わらず1.6m、東側を0.1m縮小させ1.5mとしている。梁行は南側1間のみ1.4mと拡大させている。柱穴は直径0.4mから0.5m程度の円形である。

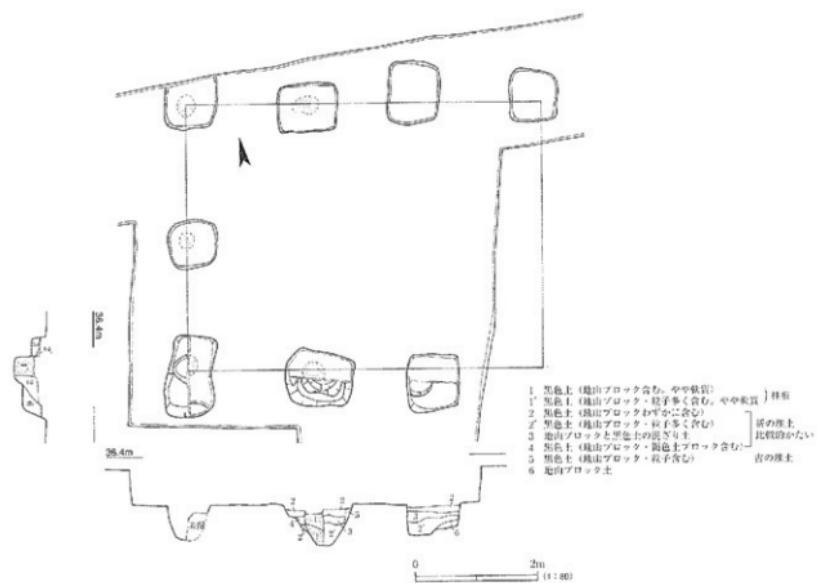
4号掘立柱建物 調査地南東で検出。3号掘立柱建物の東から7m離れ、今回検出した建物の南東端に位置する。桁行2間（5.2m）、梁行1間（3.2m）の南北棟である。建物方位はN-2°-W。中央の柱筋には東柱と考えられるピットをやや西によって検出した。柱穴は直径0.3mの円形である。

5号掘立柱建物 調査地南側で検出。3号掘立柱建物の北12mに位置する。建物南辺から南に2.0m離れて2号柵列が位置する。桁行3間（7.0m）、梁行3間（5.8m）の南北棟総柱建物である。建物方位はN-21°-E。柱間は桁行が北から2.3m、2.4m、2.3m。梁行は東から1.8m、2.0m、2.0mで、東端1間が狭い。柱穴は直径0.4m～0.5mの円形を基本としているが、東側の柱列のみ0.3mと小さい。

6号掘立柱建物 調査地南側で検出。3号掘立柱建物と5号掘立柱建物の間に位置する。9号掘立柱建物・10号掘立柱建物と切り合う。桁行3間（7.3m）、梁行2間（4.2m）の総柱建物である。建物方位はN-29°-E。柱



第4図 向野遺跡（2次）遺構全体図 その2



第5図 1号掘立柱建物造構図

間は桁行2.5mで西側のみ2.3mである。桁行は北側が2.2m、南側が2.0mである。柱穴は直径0.3m前後の円形である。

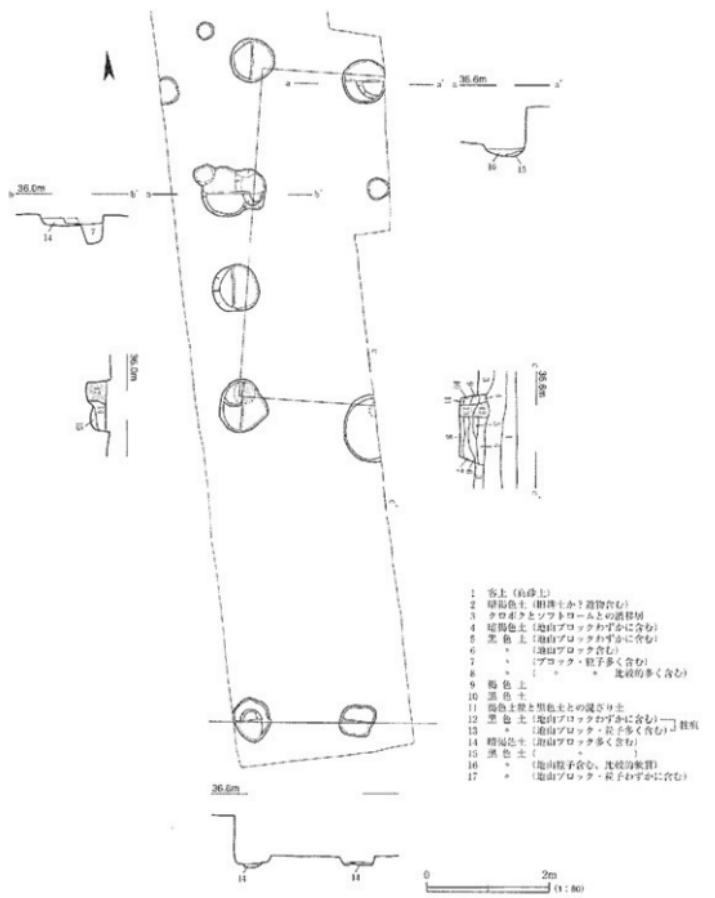
7号掘立柱建物 調査地のほぼ中央で検出。5号掘立柱建物北辺から4.0m北に離れる。桁行3間(7.4m)、梁行2間(5.0m)の南北棟である。建物方位はほぼ南北に沿う。柱間は桁行が北から2.6m、2.4m、2.4m。梁行は西から2.6m、2.4mである。柱穴は直径0.3~0.5mの円形である。

8号掘立柱建物 調査地南側で検出。3号掘立柱建物北辺から0.4m北に離れる。桁行・梁行とも1間の建物で、建物方位はN-20°-E。柱間は北側が2.7m、南側が2.8m、西側が1.9m、東側が2.0mである。柱穴は直径0.3m程度の円形である。

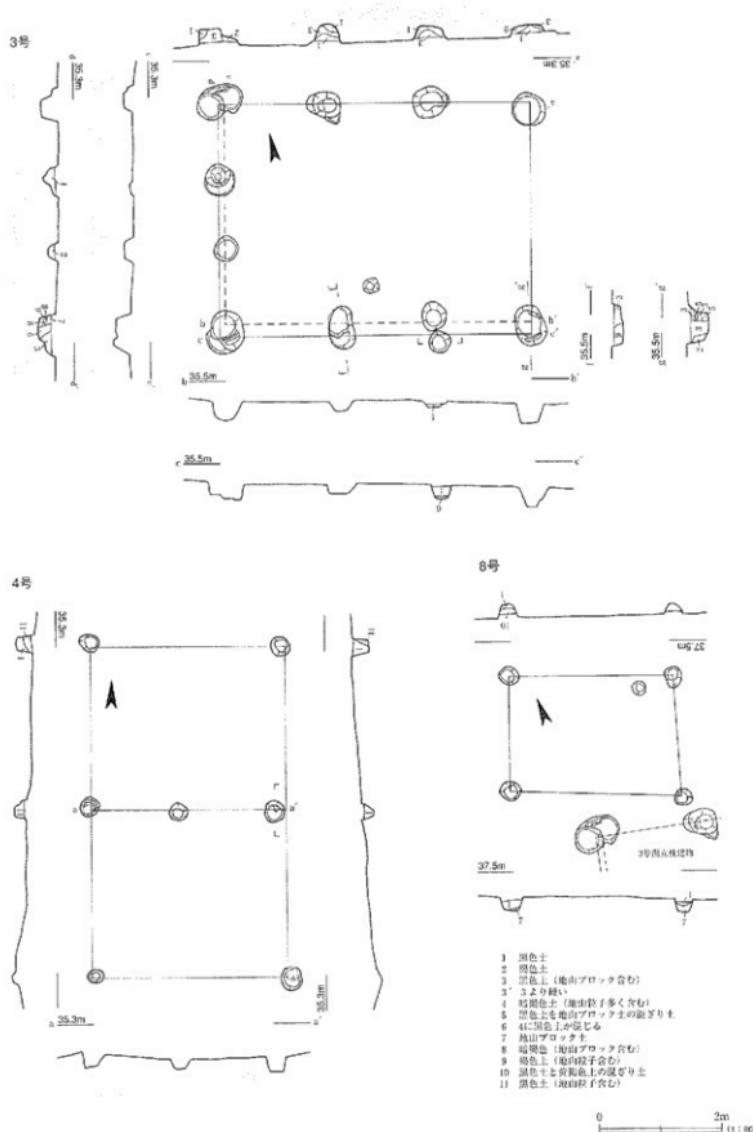
9号掘立柱建物 調査地南側で検出。6号掘立柱建物と切り合う。桁行2間(4.33m)、梁行2間(3.45m)の南北棟で、建物方位はN-25°-E。建物西側が狭く、やや台形状になる。柱穴は直径0.2m程度の円形である。

10号掘立柱建物 調査地南側で検出。6号掘立柱建物と切り合う。桁行2間(3.23m)、梁行2間(4.96m)の南北棟で、建物方位はN-16°-E。建物北側が狭く、やや台形状になる。柱穴は直径0.2m程度の円形である。

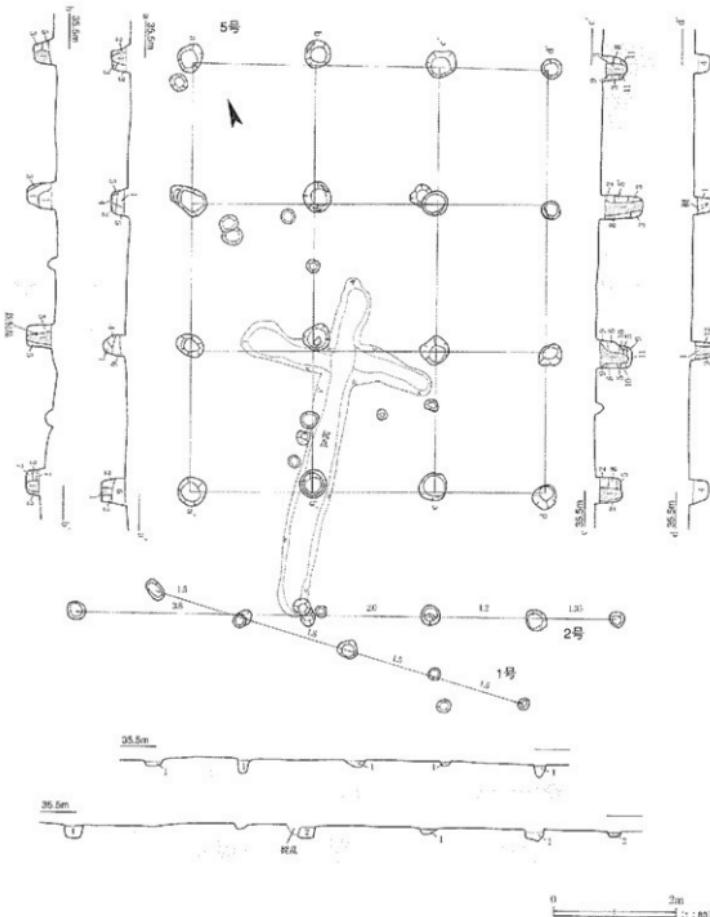
11号掘立柱建物 調査地中央で検出。丘陵平坦面の北東端に位置する。桁行4間(7.42m)、梁行3間(4.72m)の南北棟で、建物方位はN-11°-W。建物北辺は3間だが、南辺は2間分の柱穴しか確認していない。桁行・梁行とも柱間はそろっていない。



第6図 2号掘立柱建物・7号横列造構図

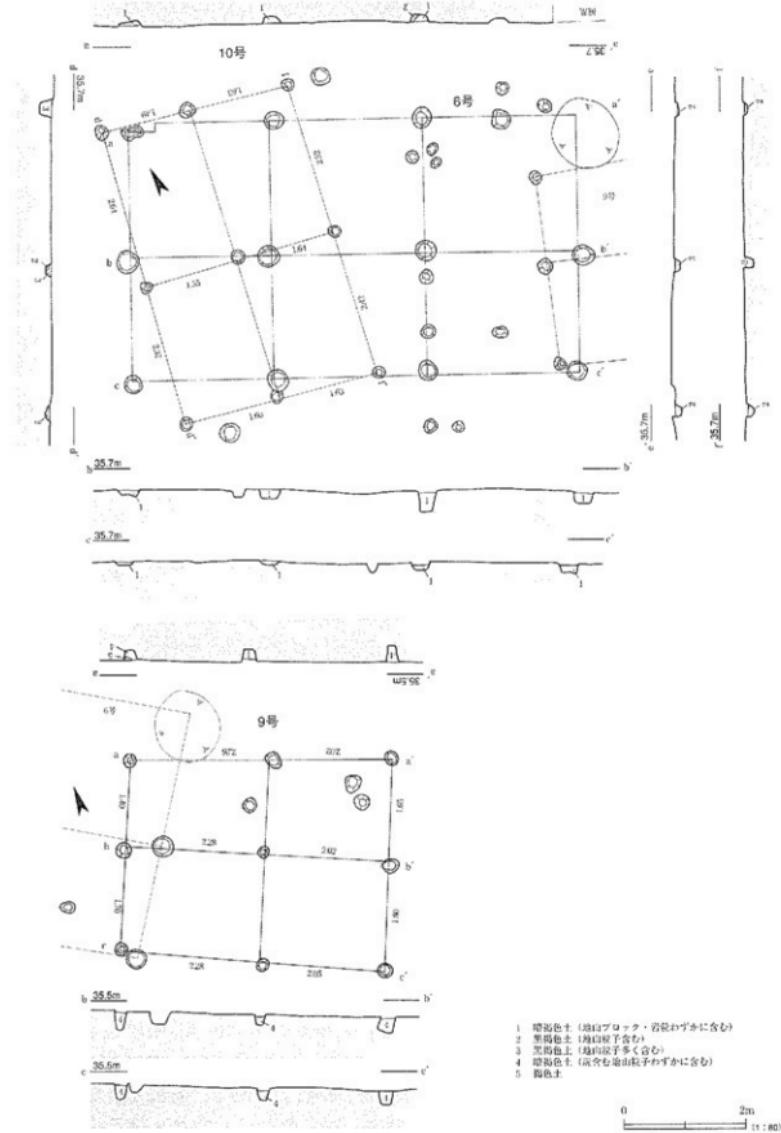


第7図 3号・4号・8号据立柱建物遺構図

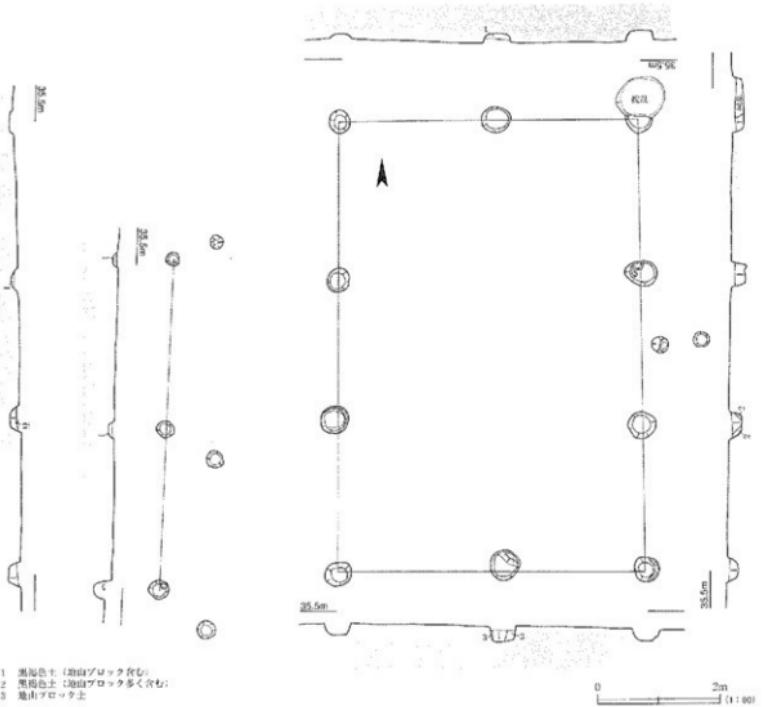


第8図 5号掘立柱建物・1号・2号柵列遺構図

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 道山（地名ワロタ含む） | 6 鹿島ヨットクと黒崎邑士の娘さちよ |
| 2 鹿島フコト多く含む。やや秋田 | 7 鹿島ヨットクと黒崎邑士の娘さちよ |
| 3 鹿島ヨットクと黒崎邑士の娘さちよ含む | 8 鹿島邑士（鹿島ヨットクと黒崎邑士の娘さちよ含む） |
| 4 鹿島邑士（鹿島ヨットクと黒崎邑士の娘さちよ含む） | 9 鹿島邑士（鹿島ヨットクと黒崎邑士の娘さちよ含む） |
| 5 鹿島邑士（鹿島ヨットクと黒崎邑士の娘さちよ含む） | 10 黒崎邑士 |
| | 11 地名アリヤマノ「わずかに黒色す」と記述 |



第9図 6号・9号・10号掘立柱建物造構図



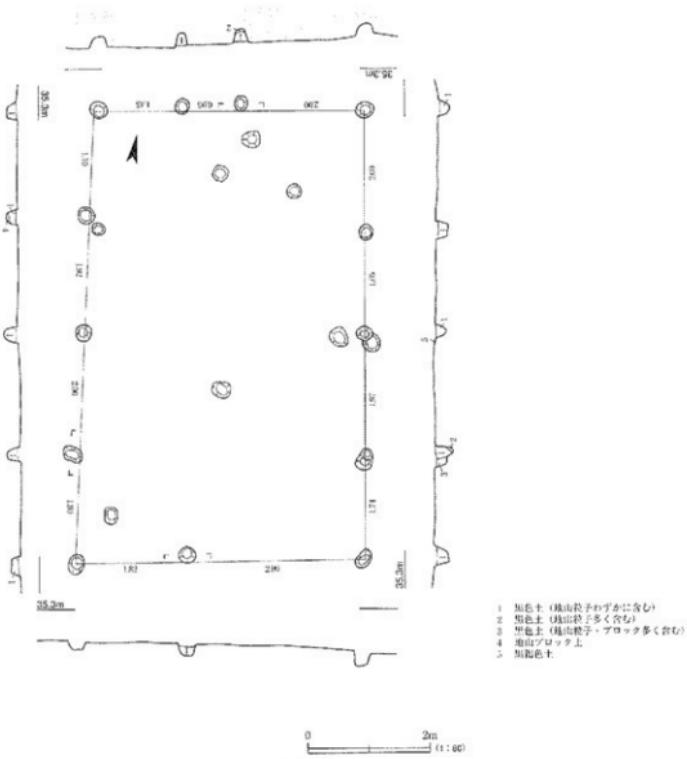
第10図 7号掘立柱建物・5号排列構造図

12号掘立柱建物 調査地北側で検出。大半は調査区外で、南北3間(5.35m)、東西1間(1.95m)を確認した。北辺に庇をもつ。建物方位はN-17°-E。柱間は南北が2.0m、底部分は1.35m。柱穴は0.5~0.6m程度の円形で、いずれも深い。

13号掘立柱建物 北西の調査区で検出。今回の調査地内では一番北西に位置する。桁行3間(6.3m)、梁行2間(4.4m)の東西棟で、建物方位はN-17°-E。柱間は桁行が西から2.1m、2.0m、2.2m。梁行は2.0mの等間である。南東の柱穴では建て替えた痕跡がみられた。柱穴は0.8~1.0mの方形を基本としている。柱穴壁・底面には、U字状の刃先の工具痕がみられる。

14号掘立柱建物 北西の調査区で検出。桁行3間(5.8m)、梁行2間(5.1m)の東西棟で、建物方位はN-17°-E。柱間は桁行1.8mだが、東1間分が北側2.2m、南側2.0mである。梁行は2.55mで北西の1間が2.3mである。柱穴は0.3~0.4mの円形である。

15号掘立柱建物 北西の調査区の東端で検出。東側は調査区外へのびる。今回の調査範囲では桁行・梁行とも1間分を確認した。建物方位はN-14°-E。柱間は東西2.55m、南北2.28mである。柱穴は直径0.3m程度の小型のものだが、比較的深い。



第11図 11号掘立柱建物遺構図

柵列

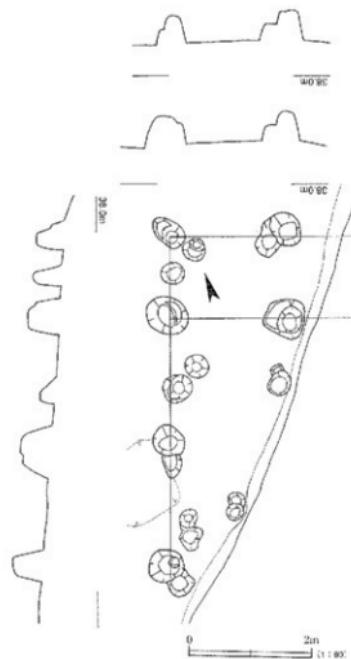
1号柵列 5号掘立柱建物の南に位置する。2号柵列と切り合う。4間(6.3m)確認した。方位はN-125°-E。柱穴はいずれも小さく浅い。

2号柵列 5号掘立柱建物の南2mに位置する。1号柵列と切り合う。4間(8.4m)確認したが、西端の1間は他の柱間の2倍近くあるため、5間であった可能性がある。方位はN-119°-E。5号掘立柱建物と方向・柱筋がほぼそろう。

3号・4号柵列 9号掘立柱建物の東に、2列並んで位置する。3号柵列は3間(6.75m)、4号は2間(3.45m)確認した。方位はN-10°-E。柱穴は直径0.3m程度の円形で、深さは0.1~0.4mである。

5号柵列 7号掘立柱建物の西2.7mに位置する。2間(5.4m)確認した。柱間は2.7mの等間。方位はN-3°-E。柱穴は直径0.2~0.3mの円形である。南側柱穴内から土師器壺がほぼ完形で出土した。

6号柵列 丘陵頂部平坦面で検出した遺構のうち一番東に位置する。東西に3間(4.85m)、その東端から南にはほぼ直角に2間(4.28m)のびる。柱穴は直径0.2m程度で、東側の柱穴ほど深い。



第12図 12号掘立柱建物構造図

7号構列 グラウンド部分確認調査トレンチ、2号掘立柱建物の南5.3mで検出。1間分 (1.8m) 確認。トレンチ外へのびると考えられる。柱穴は、軸線上で長さ0.5mほどあり比較的大きいが、形は不整で、深さも検出面から0.1m前後と浅い。

8号・9号・10号構列 北西の調査区で検出。13号掘立柱建物の東、14号掘立柱建物の南に3条並ぶように位置する。8号構列は柱間1.8mで2間、9号構列は柱間2.25mで3間確認した。10号構列は建て替えがあり、旧段階はP1旧、P2、P4旧、P6の3間 (6.9m)、新段階はP1新、P2、P4新、P5の3間 (6.45m) である。

11号構列 14号掘立柱建物の南1.4mに、14号掘立柱建物南辺とはほぼ方向をそろえて並ぶ。14号掘立柱建物の底とも考えられるが、若干柱間がちがうため構列とした。柱穴はいずれも浅い。

道路遺構

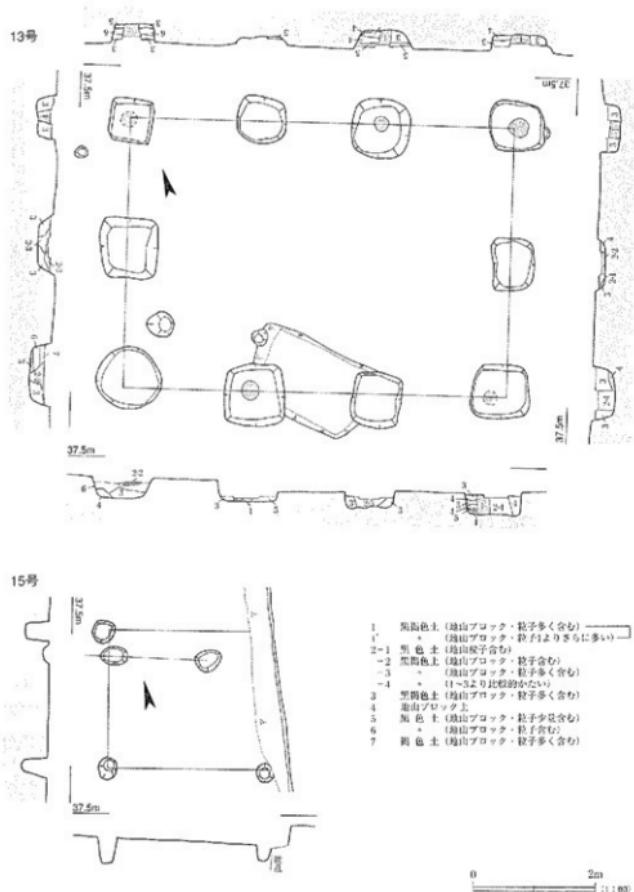
1号道路遺構 調査地の東斜面で検出。両側の側溝と考えられる溝 (1号・2号溝) と、その間の路面 (硬化面) を確認した。丘陵頂部と丘陵裾部は後世の削平により硬化面は遺存しない。等高線に対し斜め (等高線と1号溝との角度は 35°) にのび、確認できた部分での硬化面の高低差は2.6m、斜度は 7° である。硬化面が遺存していた1号溝と2号溝にはさまれた部分は直線的だが、丘陵裾部分では

2号溝が 60° ほど東へ折れ曲がり、道路遺構も同様に曲がるものと考えられる。1号溝と2号溝の間隔は心々で7.75m、内側の肩々で6.8mである。硬化面は両側側溝埋土上面でも確認し、溝埋没後も使用したことが分かる。硬化面の幅は最大で7.3mである。

硬化面は、丘陵斜面の高い側を削りやや平坦にした後、その平坦面に多数の小土壠をつくり、その土壠を断面図第2層の暗灰褐色上で埋め戻しつくられる。第2層は非常に硬く均質で、逆に地山自体はそれほど硬化していないため、埋め戻した上面を路面として使用していたと考えられる。小土壠は、斜面上方と2号溝肩部などでは長さ0.5~1.2m、幅0.4m前後の長楕円のものが心々0.7m前後の間隔で規則にならぶようにみられるが、その他のほとんどの部分では、形・配置とも規則性をみることができない。両側側溝が埋まつた後も道として使用を続けており、完掘状態での小土壠の規則性の無さは長期間にわたる補修の繰り返しによると考えられるが、断面観察では確認できていない。

1号溝は、基本的に幅1~1.2m、深さは西側肩から0.4~0.6m、東側 (路面側) 肩から0.2~0.4mで、長さ24mである。下端の2.7m分は土壤状に一段深くなっている。

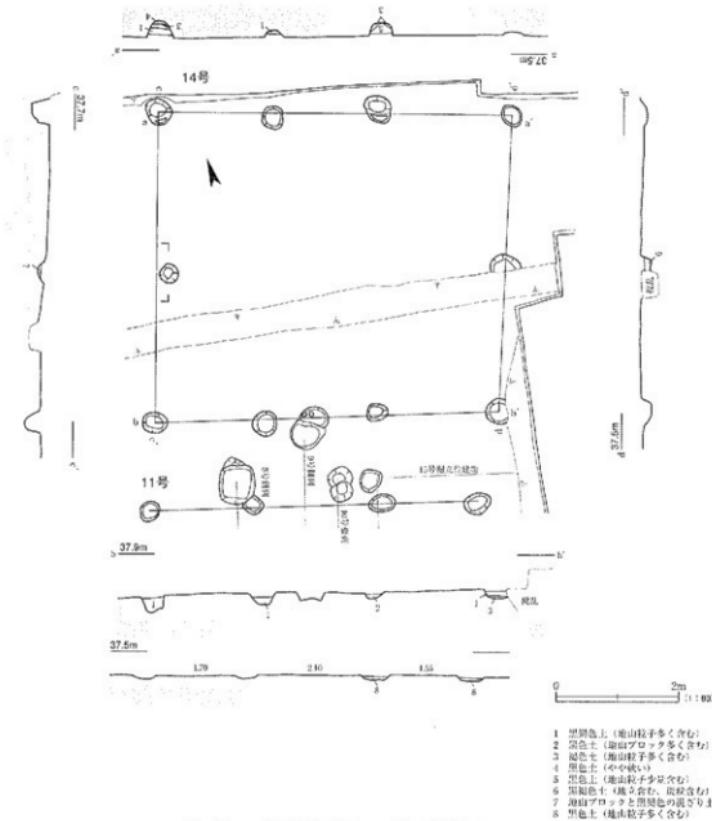
2号溝は上方では幅0.9m、調査区間では3.5mに広がるが、掘削→埋没 (埋め戻し) →道路として使用→再掘削というサイクルが幾度か行われた結果であり、溝自体は幅0.3~1m程度と考えられる。調査区の東にさらに



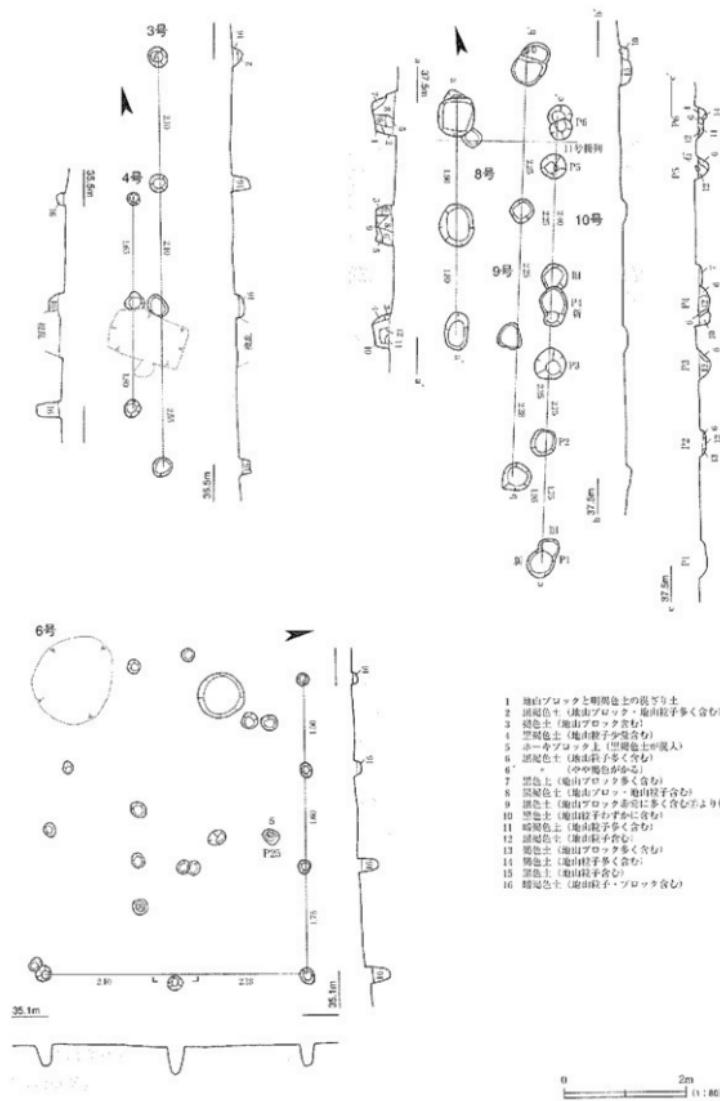
第13図 13号・15号掘立柱建物遺構図

のび、今回の調査区では約15.7m分を調査した。

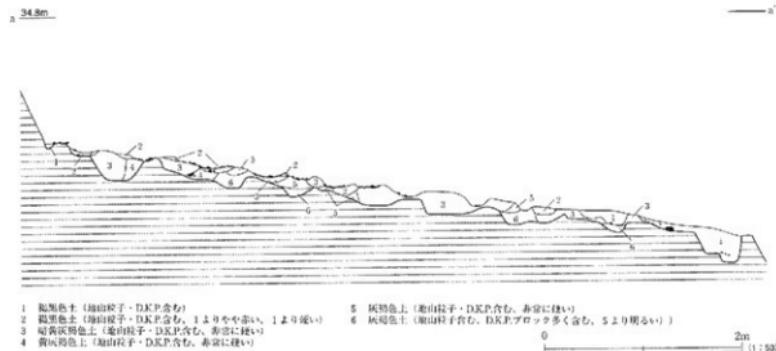
1号道路遺構覆土、硬化土、1号・2号溝壁土からは土師器壺・蓋・甕、須恵器壺・甕、綠釉陶器、軒瓦、瓦、甕、土製支脚、鉄、鉄滓、輪羽口などが出土した。



第14図 14号掘立柱建物・11号柵列遺構図



第15図 3号・4号・6号・8~10号横列構造図



第16図 2号道路遺構 a-a'断面図

2号道路遺構 1号道路遺構の北東に位置する。丘陵が南に張り出す付根部分を、等高線には直交する形で直線的にのびる。南側の調査区間がわずかに東へカーブしており、調査区外で1号道路遺構と同じように東へ曲がる可能性がある。今回の調査範囲では30mを調査した。丘陵を切り通しのように逆台形に大きく掘削し、その底面に路面を設けている。掘削幅は約15m、深さは東側で2.7m、西側で1.2m、底面の幅は5~6m。東側法面には2段の平坦面があり、平坦部分もわずかに硬化が認められた。底面は調査範囲内で約4.3mの高低差があり、斜度は約8°である。道路遺構に伴う側溝はない。2号道路遺構西側には、2号道路遺構底面と1号道路遺構をつなぐスロープのように1号道路遺構を削っている部分がある。高低差は1m、スロープ部分では土壤列、硬化面は確認していない。

路面は、1号道路遺構と同様に多数の土壤列を硬く埋め戻した上面である。確認した硬化面の幅は5.0~7.3mで、土壤列の外側まで硬化面がみられた。土壤列は長さ0.6~0.8m、幅0.4~0.5mの長方形の土壤が心々0.7m前後の間隔でならんだものである。長さが2m以上のものもみられるが、底面の様子などから、複数の土壤が重なったものであると考えられる。道路遺構の横方向の断面では、明瞭に確認できなかったが、縱方向断面（第18図a-a'）では、5回の再掘削・埋め戻しが認められる。最終次の埋土である第1層は他に比べ硬化の度合いがやや弱い。第1層に限らず土壤埋土は小石・土器細片が混じり、土壤底部に特に多くみられた。断面からは、土壤の重複が激しく不明瞭な部分も多いが、土壤が、その掘り方よりも高い位置まで埋め戻されていることが分かる。

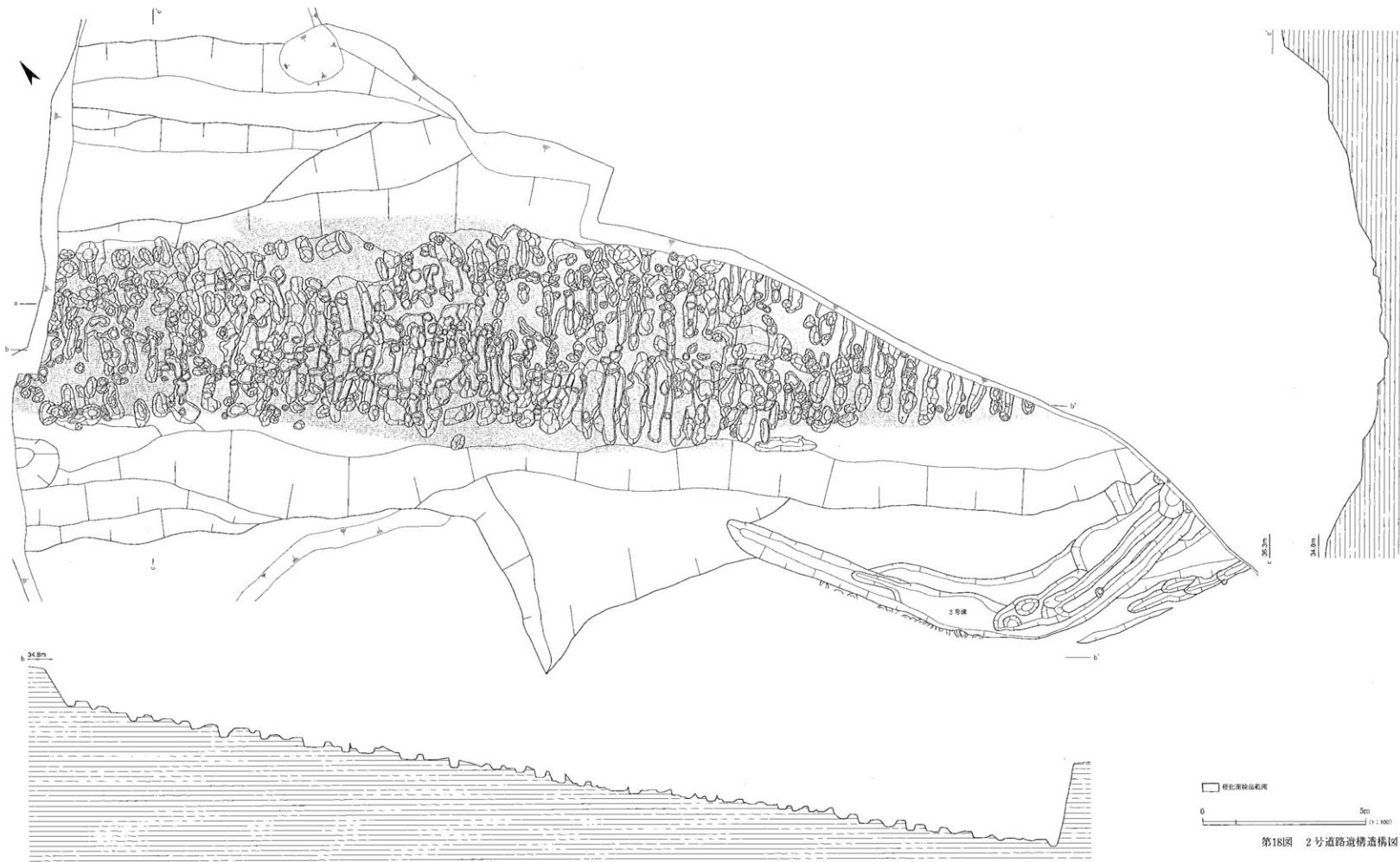
2号道路覆土、硬化土からは土師器壺・高壺・壺・須恵器壺・壺・壺・軒瓦・瓦・鐵・鐵錠などが出土した。

竪穴式住居

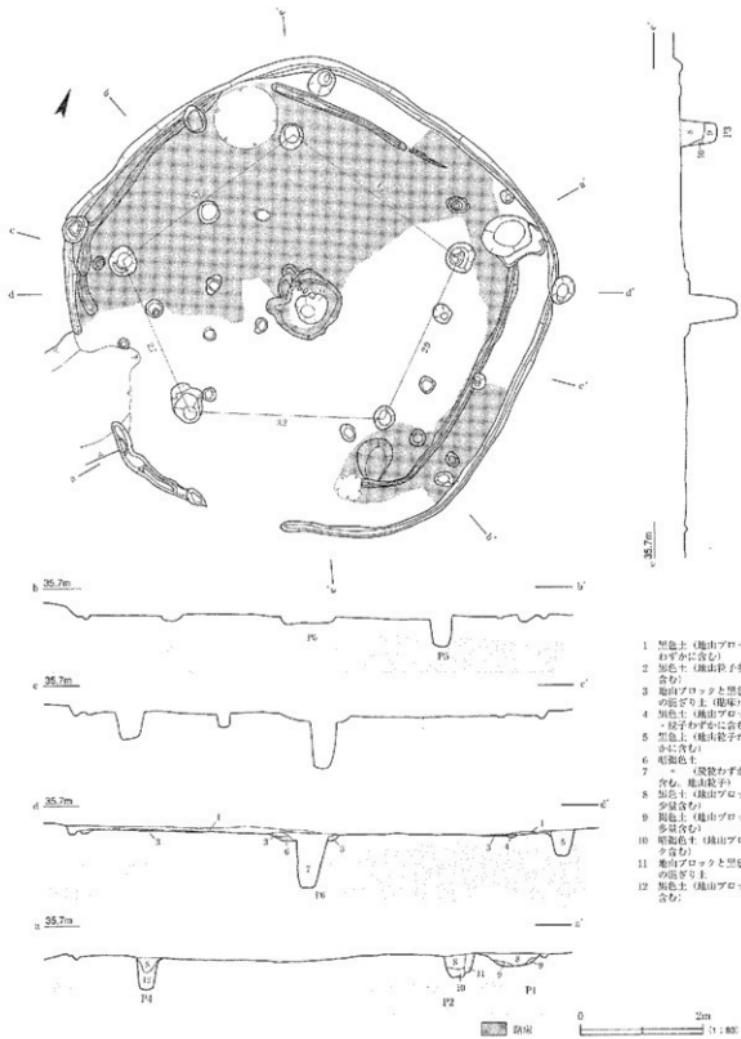
1号住居 調査地の南側で検出。丘陵頂部の平坦面南端に位置する。平面プランは隅丸五角形で、比較的大型である。主柱穴は5本で、中央ピットはやや南に寄る。削平が激しく、検出面から床面までの深さは北側で0.1m、南側は周壁溝から遺存しない部分がある。1度の建て替えがあり、主に住居の北・東・南辺を拡大させている。床面積は古段階が約30m²、新段階が43m²である。主柱穴・中央ピットは同一のものを使う。古段階の周壁溝などは貼床で埋めている。床面の遺存状況が良い北西側では、ほぼ床面全体に貼床がされていた。中央ピットは上段



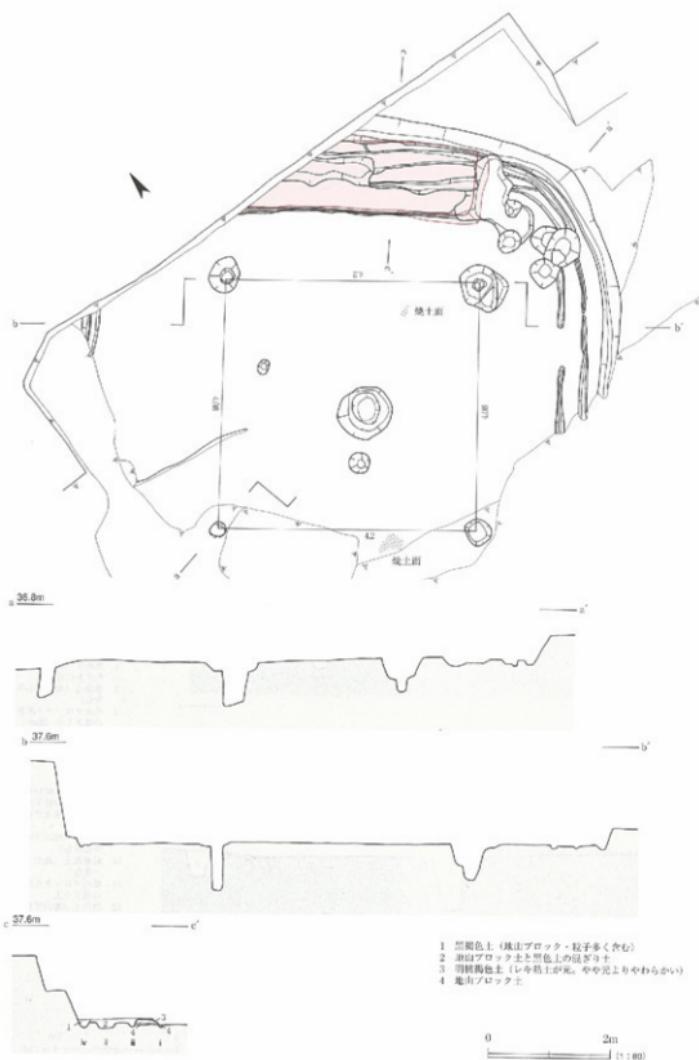
第17图 1号道路造築断面図



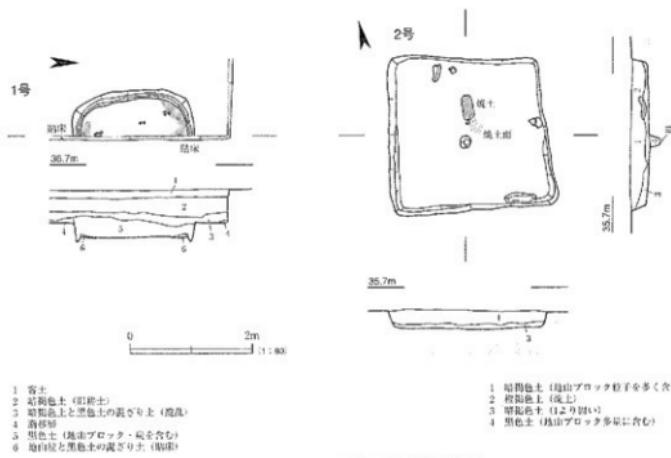
第18図 2号道路遺構遺構図



第19図 1号住居遺構図



第20図 2号住居遺構図



第21図 1号・2号住居状造構造構図

が方形、下段が円形の2段掘りのもので、上段のほとんどの部分が貼床により埋められていた。その縁部分に貼り付けるように直径0.1mほどの川原石が3個検出された。

出土遺物は、住居覆土から弥生土器、上師器、須恵器などが出土しているが、住居の時期はピット内出土の土器から弥生時代中期のものと考えられる。

2号住居 既グラウンド部分南西の調査地で検出。丘陵頂部平坦面の南端に位置する。南側は崖法面として削られている。限られた範囲での調査だが、平面プランは隅丸方形と考えられ、住居の1辺が8.7mを超える大型の住居である。主柱穴は4本で、正方形に配置される。中央ピットはわずかに南側柱穴の方へ寄る。住居西隅部分に直径0.3~0.6m前後、深さ0.2m程度のピットが集中している。住居の北東辺に沿って、幅1.2m、高さ0.1mのベッド状造構がみられる。周壁溝の数、ベッド状造構の断面から少なくとも3度の建て替えを行っている。第20図断面c-c'でみると変遷は次のように考えられる。

古	周壁溝 i
住居拡大	周壁溝 ii、貼床（第4層）
縮小	周壁溝 iii、地山土の盛上によるベッド状造構（第3層）
新 拡大	周壁溝 iv、拡大部分に地山土を継ぎ足し、ベッド状造構を整形（第2層）

住居覆土からは、土師器壺・甕・壺・高壺・甑型上器、須恵器壺などが出土している。多時期の遺物が混入しているが、床面近くから出土した遺物より、住居の時期は古墳時代前期前半と考えられる。

住居状造構

1号住居状造構 グラウンド部分試掘調査トレンチ、2号掘立柱建物の北西で確認。トレンチ内ののみの調査だが、平面形は隅丸方形と考えられる。南北長は2.0mである。検出面から床面までの深さは0.3m。横際には細いものの周壁溝が残る。床面の南北端部分には貼床がみられた。床面からは弥生時代中期の焼破片が出土している。

2号住居状遺構 洞査区中央部分、5号掘立柱建物西側で確認。南北2.5m、東西2.6mの北辺・東辺が内に入る正な方形である。検出面から床面までの深さは0.3m。床面中央やや南よりに直径0.2m程の小ピットがある。小ピット北東側には小範囲の焼土面がみられる。焼土面北側に、床面から遊離した状態で焼土塊がみられる。床面からは土器壺、土器壺壺、甕部が中空の土製支脚、窓が1点ずつ出土したが、完形に復元できるものはなかった。

段状遺構

洞査区の南側、丘陵南端で検出。丘陵の南急斜面を2段ないしは3段にカットし平坦面を設けている。斜面上下端部分で敷基の土壤を検出した。断面a-a'部分で2段目平坦部分と2段目が埋没した後に硬化面を確認した。平坦面の硬化面は幅0.6m前後、平坦面南端に沿って長さ5.2mにわたってのびる。西側が0.3m高い。サブトレニチ断面では硬化面下に掘り込みを確認したが、平面的には検出できなかった。同じ平坦面の東側断面b-b'部分では小ピット群が0.7m前後の間隔で東西に沿って並ぶが、この部分では逆に硬化面は確認していない。

段状遺構の覆土からは土器壺・須恵器など比較的多量の遺物が出土した。また、段状遺構底面に設けられた土壙からも、土器壺・須恵器などが出土している。



第22図 段状遺構図

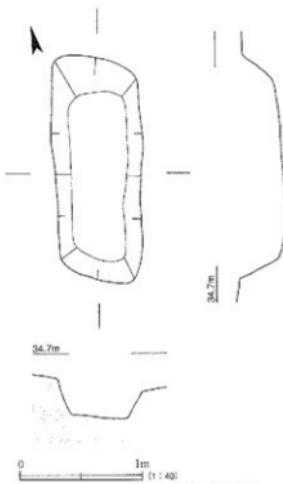
土壙墓・土壤・落し穴

1号土壙墓 調査地のやや北東、1号道路造構西側で検出。丘陵頂部平坦面の東端に位置する。底面の形状、平面形から土壙墓と考えた。長軸が等高線とはほぼ平行のやや隅丸の長方形で、長軸1.83m、短軸0.71m、深さ0.38mである。ややすく鉢状に掘り込まれている。出土遺物はなかった。

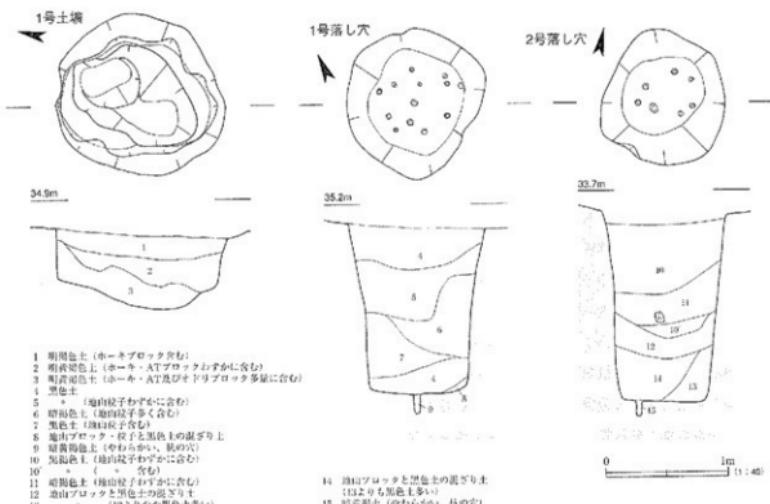
1号土壙 調査地の南東、丘陵平坦面端に位置する。直径1.3m前後の不整な円形の土壙である。底面は中央から北部分がやや窪む。最深部で深さは0.6m。土壙堆土は、地山クロボクに起因する黒色土系の土が一切なく、クロボク下層のソフトローム層・ホーキ層・AT層・レキ混じり粘質土などに起因する褐色～黄褐色の土である。出土遺物はなかった。

1号落し穴 調査地の南側、丘陵平坦面に位置する。北西辺が外に膨らむ長方形で、長軸1.3m、短軸1.1m、深さは西側で1.4m。底面には杭穴と考えられる直径数cmの穴を13個確認した。造構に伴う出土遺物はない。

2号落し穴 調査地の東端、東斜面に位置する。1号落し穴から25m東に離れる。南東部分が外に膨らむ長方形で長軸・短軸とも1m、深さは西側で1.55m。底面に杭穴と考えられる穴を7個確認した。出土遺物はない。



第23図 1号土壙墓遺構図



第24図 1号土壙・1号・2号落し穴遺構図

IV　まとめ

今回の調査で検出した遺構を、時期的なことも含め整理し、まとめとする。

時期　今回の調査では、弥生上器、土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、瓦質土器、土錐、軒瓦、瓦、鉄製品、鐵滓、砾石、磨石、敲石などが出土した。これらのほとんどが東斜面、南斜面の包含層出土で、遺構に伴う遺物は少ないと。特に、掘立柱建物・柵列などは周辺の包含層まで削平を受けているため、柱穴内のわずかな出土遺物しかない。出土した遺物は大きく5つの時期に分けることができる。

i期　弥生時代中期中葉から後葉　壇・壇頭部に指頭圧痕貼付突帯をもつもの、壇底部内面を丁寧な縱方向のヘラケズリするものがある。4号・8号掘立柱建物、1号住居、1号住居状遺構から遺物が出土している。

ii期　古墳時代前期前半　壇口縁部はやや短い二重口縁で比較的シャープにつくり、高坏の坏底部は円盤充填で閉塞する。高坏内面は器面が平滑である。2号住居がこの時期である。

iii期　奈良時代後半から平安時代初頭　土師器坏底部外側の調整が丁寧なヘラケズリ、もしくはナデで、器壁が比較的厚い。内面非常に平滑である。少量ではあるが内面に暗文を施すものも含まれる。坏には赤褐色の赤色顔料が丁寧に塗られる。伯耆国序編年¹³第1段階から第2段階の前半にあたり。國版8（以下略）の1・2がこの時期である。1号・3号・13号掘立柱建物、2号住居状遺構、1号道路遺構側溝の1号・2号溝からこの時期の遺物が出土している。1号溝出土遺物のなかには墨書き「保」のある土師器15・16がある。

今回の調査地内では瓦も比較的多量に出土した。軒瓦も含まれ、いずれも伯耆四分寺跡・国府跡で出土するものと同様のものだが、軒平瓦18は未知の型式である。花形の中心筋りから左右に広がる均整唐草文で、曲線頭か。

iv期　平安時代前葉　土師器坏底部外側がヘラ切り後未調整に近い。器壁が薄く、つくりが粗雑になる。坏底部外側、もしくは全体を赤色塗彩しないものが現れる。國府編年第2段階の後半にあたり、3・4がある。2号・7号・11号・14号掘立柱建物、3号・5号・11号柵列、1号道路遺構覆土、2号道路遺構硬化土、段状遺構からこの時期の遺物が出土した。段状遺構出土の則天文字「天」の墨書き土器17がある。

v期　平安時代中葉から後葉　土師器坏・皿の底部外側が回転糸切り。坏・皿にロクロナデの痕が残る。柱状高台をもつものもある。國府編年第3段階以降おむね12世紀までと考えられる。5・6などが含まれる。5号・6号・9号・10号掘立柱建物、1号・2号・4号柵列、2号道路遺構硬化土、覆土からこの時期の遺物が出土している。

遺構の特徴・配置　i期　丘陵の平坦面南端に1号住居、丘陵尾根筋間に1号住居状遺構を確認した。1号住居は平面形が隅丸五角形で、床面積は30m²を超え、比較的大規模の住居である。両者とも貼床を有する。

ii期　今回の調査範囲の中では、丘陵の南端で2号住居1棟を確認したのみである。2号住居は平面形が隅丸方形で、床面積は40m²を超えると推定される大型の住居である。

iii期　この時期の遺物が出土した遺構のほか、13号掘立柱建物と8号・9号・10号柵列、3号掘立柱建物と3・4号柵列は遺構の方向がほそろうためこの時期の遺構となる可能性がある。12号掘立柱建物周辺（調査地北東部分）からもiv・v期の遺物が出土しており、12号の時期がiv期までさかのぼる可能性がある。

この時期から掘立柱建物を主体とする集落構成になる。掘立柱建物・柵列とも建て替え、もしくは少し位置をずらしての改作が認められる。遺構の方位はN-10°-EからN-17°-Eである。大型の柱穴をもつ掘立柱建物（1号・13号）が、方位はややずれるものの、47m離れては東西に並ぶ。両方とも柱穴は方形を基本としている。2号住居状遺構は床面から、壇・壇頭部・土製支脚が出土し、床面に小規模ながら焼土面が認められた。使用状態が復元

される出土状況ではないが、厨として考えられる。

東斜面には1号道路遺構がつくられる。1号道路遺構は両側に側溝をもち、路面の下部、基礎構造としてのいわゆる波板状凹凸をもつ。路面（硬化面）が確認できた直線部分では両側側溝は平行を保つ。1号溝の斜面上端部分は、丘陵の頂部にさしかかるあたりで掘削を止めており、両側の側溝は土砂の流入が激しいと考えられる、もしくは雨水などで路面の流出する可能性がある丘陵斜面部分にのみつくられていると考えることができる。それらの構成・構造からはしっかりととした土木技術の知識・組織的な施工を読み取ることができる。一方で、後述する2号道路遺構に比べ地形の変更度は少なく、2号溝の走向から周辺の地形に合わせ道路を曲げている様子が伺われる。

iv期 時期の所で挙げた遺構のほか、7号掘立柱建物と方位が同じで、建物が南北にそろう4号掘立柱建物もiv期の遺構である可能性がある。大型の柱穴をもつ2号掘立柱建物・7号欄列があり、これらの柱穴は円形である。建物の方位はややばらつく。iii期の2号住居状遺構と3号掘立柱建物、iv期の7号掘立柱建物と4号掘立柱建物とは同じような間隔で位置している。今回の調査範囲だけでは不明確な部分が大きいが、あえていうなら、建物規模・構造等は変化するものの建物配置はiii期を踏襲している可能性がある。

今回の調査地の立地する丘陵の北側の基部に2号道路遺構がつくられる。1号道路遺構は側溝が埋まつた後も使用されており、そのあたりの時間的な幅と2号道路遺構の造成との前後関係は現段階では不明確である。現段階では、1号道路遺構の硬化面を削る部分が存在することから、2号道路遺構は1号道路遺構に後続すると考えておく。2号道路遺構は、丘陵を逆台形に開削し、その底面に1号道路遺構と同じく路面の基礎構造として波板状凹凸を施す。北東斜面部分が段状になるため一度に開削されたとはい難い面もあるが、開削された上端の幅は15m、深さは約2.7mと大規模である。その規模、整然とした土壁の様子は、1号道路遺構に比べより熟練した、より組織的な工事を感じさせる。周辺の地形と路面の傾斜から推察すると、2号道路遺構の路面は1号掘立柱建物の北側でようやく丘陵の頂部平坦面に達する。2号道路遺構は、調査地の東端でやや東に曲がる可能性はあるが、1号道路遺構よりも直線性が強く、直進部分の方位はN-52°-Wである。

今回の調査地から北西に250m離れた同一丘陵北側には1次調査地²⁾がある。1次調査では、同様の構造をもつ道路遺構（1号～5号溝状遺構）が調査されている。うち1号・2号は9世紀後半以降で、方位がN-60°-Wで直線的に伸びている。丘陵頂部の様子が不明確ではあるが、1次調査1号・2号溝状遺構と2次調査2号道路遺構は同一の連続する道路遺構で、それは向野丘陵を南西→北東にほぼ一直線に貫いていると考えられる。

v期 丘陵平坦面南側に、掘立柱建物・欄列などが密集する。掘立柱建物はすべて籠柱建物である。うち、5号掘立柱建物を除くと、柱穴が小さく、柱間が不揃いで、建物の重複が激しいことから、比較的簡素な建物であったことが想定される。2号道路遺構の硬化土中からも遺物が出土しているため、この時期までは補修・使用が続いている。

iii期・iv期の様相についてさらに付け加える。1次・2次調査では古墳時代後期から終末の遺物・遺構は確認していない。南の丘陵に伯耆国印跡が置かれるのと同時に、大型の柱穴をもつ掘立柱建物を含む、掘立柱建物を主体とする集落が現れることになる。1号道路遺構は、あくまで地形に合わせたもので、1次調査地には同時期の道路はのびていないため、丘陵上の集落に昇るために敷設された道と考えられる。これらのことから今回の調査で確認した集落は、前代から連続する集落ではなく、「国府」のなかに新設されたものであるといえる。

iv期にも連続して掘立柱建物の集落を確認した。1次調査地では、この時期に道路遺構に接して堅穴式住居・住居状遺構がつくられているが、住居群はほぼ1時に限定されるものである。このことは1次調査地と2次調

査地での集落の性格の違いに起因すると考えることができる。

「国府」内、それも国府跡に非常に近接した立地であること、大型の柱穴をもつ建物が存在すること、集落から南東方向、つまり「国府」中心部への道路造構も同時に敷設されていること、灰釉・綠釉陶器をはじめ質・量とも充実した出土遺物などを積極的にとらえれば、「国府」内の何らかの施設である可能性はある。今回の調査範囲では全体の建物配置・構成が不明瞭であること、建物方位の統一性が弱いこと、区画施設が確認されなかつたこと、文字資料として判読できたのは村の意である「保」であることなど、遺跡の性格を判明させるにはさらなる資料が必要である。

2号道路造構は、その計画性・構造の規模から国レベルでの造営と考えてよいものである。造営の時期は9世紀後半で、国府跡では主要建物が礎石建物に変化し、新羅との関係悪化により日本海沿岸地域に緊張がもたらされるという動向のなかで造営されたものである。向野丘陵を斜行する道路造構を北西にのばすと、山頂に貞觀9年(867)、新羅海賊襲撃のための四天王像を安置した四王寺跡がある四王寺山の南西麓に至る。2号道路造構はそれらの遺跡をつなぐものと推察される。道路造構と四王寺山の南西麓が交わるあたりには「白市」「白市平」「上白市」「下白市」「奥白市」などの小字が残り、国府の構成を考えるうえで興味深い。

以上、羅列的ではあるが今回の調査で得た資料をまとめてみた。国府周辺の施設群、それらに関連する集落群としての「国府」の様子を示す一資料として重要な遺跡である。国府北側にも国府が広がるが、造構配置からは従来言られてきた方格地割は国府北側には存在しないことが明らかになった。今回の調査では造構の詳細な検討、遺物・時期の検討などを残したままだが、今後の調査・研究の課題としたい。

註)

- 1 番淳一郎他 『伯耆国府跡発掘調査報告書(5・6次)』 倉吉市教育委員会 1979
- 2 根鈴智津子他 『向野丘陵発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1998

遺物一覧表(図版8)

番号	器種	出土位置
1	土師器 扇	2号位焼軋道構 頂上
2	土師器 年	調査区北側 住合跡
3	土師器 扇	調査区北側 住合跡
4	土師器 商物付耳	調査区北側 住合跡
5	土師器 扇	P25
6	土師器 扇	2号道路造構 旗土下部
7	土師器 箱	東斜面 包含層下部
8	土師器 箱	1号梯
9	崩壊器 商物付耳	2号梯

番号	器種	出土位置
10	崩壊器 商物付耳	東斜面 包含層下部
11	崩壊器 箱	東斜面 包含層
12	崩壊器 箱	1号道路造構 頂上
13	崩壊物 瓦	1号道路造構 頂上
14	崩壊物 瓦	東斜面 包含層
15	土師器 扇	1号梯
16	土師器 扇	1号梯
17	土師器 年	段状造構 頂上
18	瓦平瓦	東斜面 包含層

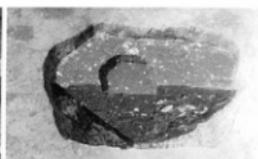


調査地遠景（法華寺探道から）

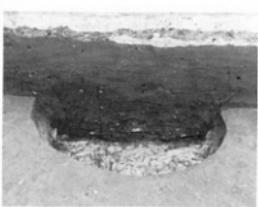


調査地全景（南東から）

図版 2



1号掘立柱建物柱穴断面



2号掘立柱建物柱穴断面

2号掘立柱建物・7号樁列
(北西から)



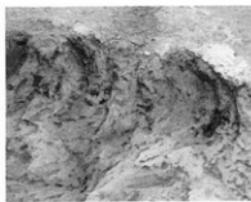
1号・2号掘立柱建物遠景 (北西から)



5号掘立柱建物（東から）



7号掘立柱建物（東から）



13号掘立柱建物柱穴工具痕跡



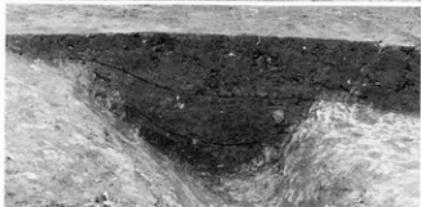
13号掘立柱建物（南から）



1号・2号道路造構完掘状況（南から）



1号道路造構完掘状況（南から）



1号溝断面（南から）



1号道路造構断面（南から）



2号道路遺構 硬化面（南西から）



2号道路遺構 硬化土掘下中（南から）



2号道路遺構断面（南西から）



2号道路遺構 完掘状況（南から）

図版 6



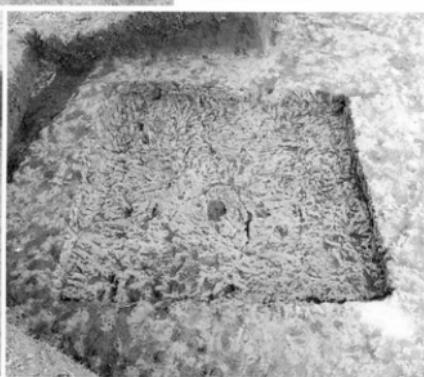
1号住居（南から）



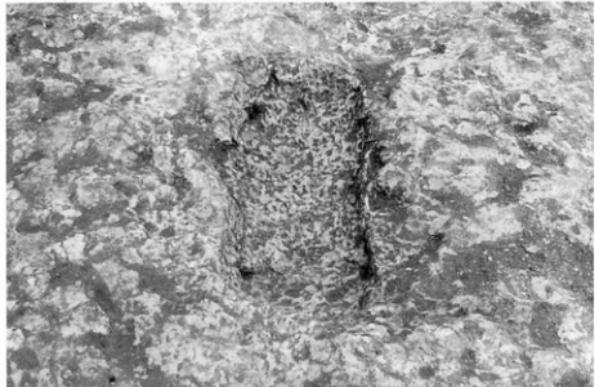
2号住居（南から）



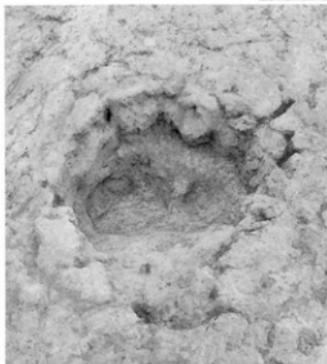
1号住居状遺構（東から）



2号住居状遺構（南から）



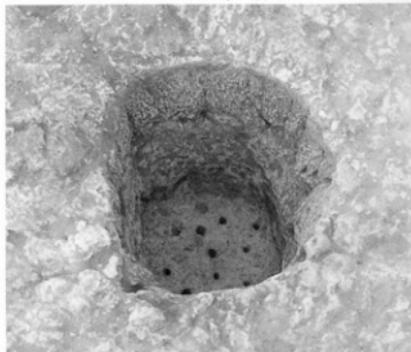
1号土壙墓（南から）



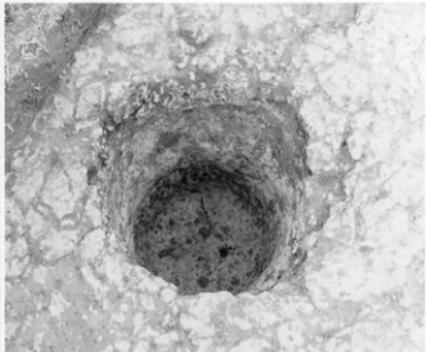
1号土壙（南から）



1号土壙断面（南から）

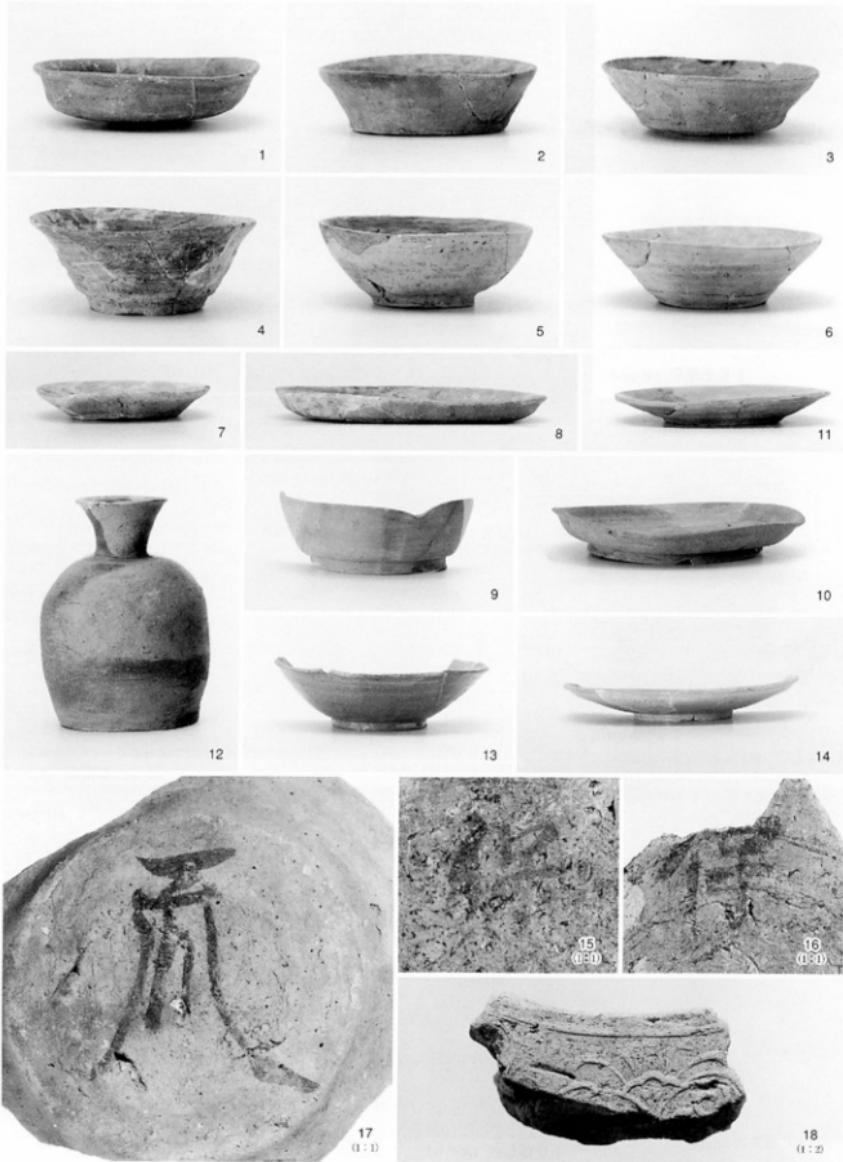


1号落し穴（北から）



2号落し穴（北から）

図版 8



報告書抄録

書名	向野道路第2次発掘調査報告書						
副書名	鳥取県立倉吉農業高等学校グラウンド整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査						
巻次	一						
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第114集						
編著者名	岡平 拓也						
編集機関	倉吉市教育委員会						
所在地	〒682-8611 鳥取県倉吉市葵町722番地 TEL 0858-22-4419						
発行年月日	西暦2003年3月20日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町村:遺跡記号	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
向野道路第2次調査 字向野155他	倉吉市大谷	31203:6TOM-2	35° 25' 50"	133° 47' 10"	20010418~ 20020320	5,291m ²	倉吉農業高等学校グラウンド整備に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代:主な遺構	主な遺物			特記事項	
向野遺跡	集落	弥生:堅穴式住居1 住居状遺構1 古墳:堅穴式住居1 奈良・平安:掘立柱建物15 道路遺構2	弥生土器・土師器・須恵器・墨 青土器・軒用鏡・灰輪陶器・綠 釉陶器・土鍬・軒瓦・瓦				奈良・平安時代集落は、掘立柱建 物が主で、伯耆国庁跡と同時期に つくられ始める。道路遺構も同時 期のもので、うち1条は丘陵を大 規模に開削している。

向野遺跡第2次発掘調査報告書

平成15年3月20日 印刷

平成15年3月20日 発行

編集 倉吉市教育委員会
発行

印刷 勝美印刷株式会社
製本